

東日本大震災から一年

2011年3月11日に東北地方を襲った大震災。

その被害を甚大にした大津波は、近隣の町にも被害を及ぼしました。

自然災害も少なく「安全安心で平和な町・安平町」とPRをしています。大震災から学べることを、備えておくことは重要なことです。

想定を超えた災害

昨年の大震災には「想定を超えた」という言葉が多く使われています。

電気や水道、輸送経路を含めてほとんどのライフラインが断られました。

被災地には情報も途絶え、不便な生活の上にいるいろいろな不安な状況に陥った大きな災害となりました。

更に福島第一原子力発電所で起こった事故は、今もなお被災地の復興を大きく遅らせる想定の内になかった災害の例となっています。

被災地への支援

町では災害発生直後より職員の派遣や生活物資の支援などを行いました。

また、被災者の受入態勢も整え、受入被災者への生活援助策も設けて対応を行っています。

その他にも消防職員を災害直後から現地に派遣し救急活動や捜索活動などを行ったことや、民間事業者が直接現地に物資を提供したこと、町民の方々のあたたかい支援の輪として社会福祉協議会や日本赤十字社を通じて募金が届けられました。



災害から学ぶ・備える

大正12年に発生した「関東大震災」を機に9月1日を防災の日として定め、全国的に防災訓練等が行われています。

本町でも季節や形態を変えた訓練を実施していますが、全国的に今回の大震災を教訓に防災計画などの見直しを現行で行っています。

安平町も例外ではありません。が、海岸線を持たない地形は津波対策の見直しの必要性も低く、今までの計画や実施してきた訓練や講演会の内容は、今も「もしもの災害時」には生かせる内容となっています。

防災訓練などでも説明のあつた事例を何点か紹介します。

用意しておくの良い物

懐中電灯・ラジオ・水・非常食などを常備することが一般的に言われていますが、家から逃げる際にはメガネやガラスを踏まないようにスリッパ(新しい靴)を手元に用意しておくこと、避難所生活などを考えると毛布や防寒具といった寒さ対策、入れ歯や持病などの薬も必要とされています。

●災害時の防災活動は「地域の力」が必要です

災害時には、通信手段の混乱や役場や消防などの救助体制だけでは十分に防災活動が行えない場合も想定され、そんなときに頼りになるのが「近所の方たち」です。

災害による被害を最小限に抑えるには地域住民の自主的な防災活動も重要であり、そのために自治会や町内会単位で「自主防災組織」を設立し、日頃からの備えや防災訓練の実施、災害時には組織的な活動をできるようにすることが大切です。

現在町内では「自主防災組織」の設立に向け動き出している自治会、町内会もあり、町としては設立に向けての支援(資料提供、説明)を行っています。



いざというときの防災体制の確立に向けて、「自主防災組織」の設立について地域で話しあってみてはいかががでしょうか。



震度6弱の地震発生!

「その時あなたは どうする?」
「家族に声をかける」
「落ち着けと声をかける」

避難する前に何をします?

「食事を摂る」
「ブレーカーを落とす」
「逃げたことをわかるように張り紙をする」

※ガスは大きな地震の場合、安全装置が働き遮断されるが、電気は停電後の復旧時に漏電による火災発生の可能性があるため重要なポイントです。